

[エッセイ]

論文について

高野 光 司

近ごろSTAP細胞の発見に関する論文について、色々かしましく論議されているが、大学教師として一言わせていただく。

第一に、博士論文の主査の責任はとて大きい。(ドイツでは俗に論文の主査のことをDoktorvaterと言うからDVと省略。)DVは現在の日本の制度では大学院教授であって、大学院生を一人前の研究者に育て、つまり学問の何たるかを教え、研究論文が一人で書けるように指導する責任があるべきであろう。博士論文のDVがきちんとした教師であり、研究者であり、論文の主査であったならば、O女史のような無軌道博士は居なかったであろう。

第二。そもそも論文を受託した「Nature」誌が悪い。というよりNatureにおけるこの論文の査読者が悪い。最も権威ある雑誌の一つといわれているのになぜ査読者は欠陥の多い論文をrejectしなかったのだろうか。

第三。こうした事は、本来、素人がつべこべいう問題ではない。つまり間違っ受受理されてしまった論文は、次の研究論文の著者たちが、論文のなかで正・不正を判断すればそれで済んだことであつたらう。論文が受理されていてもまだ印刷されていないのなら論文を「取り下げる」こともあるが。

ここまで2014年4月1日、東葛医療福祉センター光陽園(中村 仁 センター長、昭53卒)就職を記念して書き始めたのだが、STAP細胞事件にはいろいろ複雑な事情があるようなので擱筆している間に、段々経緯がわかってきて、屋上屋を架すでもあるまいと断筆も考えた。

他方、私の若年の頃、千葉大学在籍時代、あの

はな同窓会報に投稿したことを思い出した。

同窓会報の拙著は

「論文の著者名について」

第1生理学講師 高野光司

とある。文の長さは約千字である。

「……共著者名には当然、その研究に直接関係した人々の名があげられ、関係のない人の名前は書かれるべきではない……順序は特にアルファベット順などと指定のない場合は貢献度の異なるものから順に並べるべきものであって……地位その他研究の本質と無関係なものが考慮されることはおかしなことである……寄与の大小を決めることは必ずしもやさしいことではない。実際に手を下した人が、多くの場合貢献度が最も大きいのが通例……。研究においては、着想が最も大切なものの一つであるが、単にこんなことをやってみては、と言う程度の示唆はこの場合にはあてはまるまい。」

今回のSTAP細胞事件の場合も、斯界の世界的研究者をふくめてDV他年長関係者が論文の何たるべきかを正しく考えていれば、問題はおきなかったであろう。本来ならば“論文を書く段階のみの参加である”と言うような著者の一人の発言はない筈だ。またこの論文の共著者が14(8)名とはどうしたことか。献辞、または謝辞で言及すればよい人達が著者になっていたかもしれない。

翻って我が大学ではどうか。貢献度には順位は有ろうが、「文責」は「著者」全員にある。我が千葉医学雑誌の論文にも時々20人を超す著者名

ゲッティンゲン大学医学部教授(元病態神経生理学部長)

Kohsi Takano: On the scientific paper.

(ehmal.), Abteilung fuer Pathoneurophysiologie, Universitaet Goettingen, Germany.

263-0005 千葉市稲毛区長沼町25-1 スマートヴィレッジ稲毛A-1104

Phone & Fax: 043-301-3236. E-mail: kohsitakano@gmail.com

が並ぶことがある。理由はあろうが、「全員が目を通していいのか」と思う。金魚の糞の末尾に名前があるのを知らなかった、ではすまない。STAP事件を他山の石とするなかれ。

この原稿を書いたのは1968年12月6日、会報は69年2月1日発行とある。学生運動の盛んなころ、東大時計台攻防戦が1969年1月14日。その頃、翌日には我が医学部学生がストライキに突入せんとする深夜、木村（法医）、永野（解剖）、加濃（脳研）、仙波（脳研）、高野（生理）の若手が議論し、翌早朝、教授会に、学生との話し合いを進言してストライキ突入を回避させた。その半年後に私は日本を離れた。その数週後には千葉大学医学部も無期限ストに突入した。そのような時代だった。

若い講師として学問への理想主義に充ちて、力んで書いたのであろうが、当たり前と言えばあま

りにも当たり前のこと、今日にも当てはまることであるから、あえて一部を紹介した。そのようなわけで生じた、本雑文の書きはじめと後半のちぐはぐのお許しを乞う。

半世紀近く前に拙文を書いた動機は、この古い雑文を書く少し前、ある日本の学会で、我が大学を代表するような大教授が「特別講演」後に、若輩でもその仕事に手を染めていたならば簡単に答えられる質問に答えられないということがあったからであった。つまり、研究に実際に参加してもしなければ、内容もよく理解してもしない題目について、教授であるがゆえに講演したことに憤慨したからであった。

同窓会の清水久美子様をわずらわして、古い同窓会報から拙文を探していただいたことに感謝する。